

ジョン・カラピント<sup>1)</sup> (著)  
『通訳者：普遍文法への挑戦』<sup>2)</sup> (上)

三宅正隆 (訳・注)

**Abstract**

Hauser, Chomsky, and Fitch claimed in their influential and controversial 2002 paper that the uniquely human, language-specific faculty in narrow sense consists only of recursion, and that recursion cannot be considered as an adaptation to communication. Contrary to their claim, D. Everett argues that Pirahã lacks this fundamental characteristic of human language, contending that recursion is a tool made available by the brain, and that it need not be used. This is an annotated translation of an inspiring report by John Colapinto, a staff writer at *The New Yorker* magazine, about Tecumseh Fitch's visit to the Pirahã tribe in the rain forest of Brazil. With Everett as his guide, Fitch conducted linguistic experiments to ascertain Everett's claims. The author writes about Everett's wife, also one of a few foreign speakers of the language, as well. The couple's contrasting views regarding the language help reveal some of the exotic and unique characteristics underlying the Pirahã language and culture.

In the postscript, I will touch on some of the recent discussions regarding the term "recursion," with special attention to the "controversy" about the Pirahã language.

**注釈者序文**

Marc D. Hauser, Noam Chomsky, W. Tecumseh Fitch が 2002 年に *Science* に発表した論文 "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?" は生得的言語能力としての普遍文法研究に進化論的議論を再度吹き込むといういわゆる「生物言語学」の新たなステップを開いた点で画期的な論文である。しかしながら一般にはヒトの生得的言語能力を「再起性」(recursion) のみに限定したように受けとられ又、この特性はコミュニケーションという機能のための進化論的適用の結果ではあり得ないという極端な仮説故すぐに論争の火種ともなった。例えば、S. Pinker & R. Jackendoff は "The Faculty of Language: What's Special about It?" と題して Hauser 等の論文を細分にわたって検討、批判を展開した。やや時を置いて再度 Chomsky らの反論が発表され (Fitch, Hauser, & Chomsky, 2005) またそれに答える Jackendoff & Pinker (2005) の論文が出るなど、その後も活発に議論が続いている。しかしながら普遍文法 (UG) の考え方や進化論的解釈においては異なるものの Pinker や Jackendoff の立場はヒトには生得的言語能力があるという主張自体では Chomsky 等の立場と共通している。一方ある時点までは Chomsky

理論の擁護者であった Dan Everett が 2005 年に *Current Anthropology* 誌に発表したピーダハン語についての論文は Chomsky や Pinker などが擁護する普遍文法の必要性自体に疑問を投げかけるもので、Pinker の言葉として以下の翻訳にも紹介されているようにこの説は「パーティーに投げ込まれた爆弾」と受け取られるようになり、その後言語学はもちろん人類学や認知論等の分野でこの Everett のピーダハン語についての議論が活発になっている。

この翻訳の原文は *New Yorker* の記者 John Colapinto による、先にあげた論文の著者の一人である Tecumseh Fitch が Everett の論文内容を自ら確かめたいとアマゾンに出かけた時のレポートであるが、フィールドワークについての興味深い報告と合わせて Everett, Chomsky を始めとする著名な言語学者との様々な出会いややり取りが随所に織り込まれていて、この点でも興味深いレポートとなっている。

あとがきでこの再起性に関する最近の論争についてピーダハン語とのかかわりで簡単にふれる。

**Keywords :** ピーダハン語, 普遍文法, 再帰性 (リカーション), 言語相対性, 直接経験の原理

昨年7月のある朝、アメリカ人の言語学教授ダン・エヴェレット (Daniel L. Everett) と私はセスナの水上飛行機のプロトからブラジル北西部の熱帯雨林を流れるマイシ川の縁の砂地に降り立った。この川はアマゾン川の支流で、川幅も狭く、鋭く湾曲している。少し高くなった土手には、かれこれ30人ほどの、背は低く褐色の肌をした子供や大人たちが、ある者は弓矢を握りしめ、またある者は赤子を腰にのせて集まっていた。この人々はピーダハン (Pirahã) と呼ばれる狩猟採集民で、55才の赤ひげを生やしガッシリした体格の、以前には福音教会の牧師をしていたこともあり張りのある大きな声をしたエヴェレットの姿を見ると、めずらしい鳴鳥の群がさえずり声を上げているような、知らない人には人間のことばだとは想像もできない程旋律豊かな音声を響かせながら我々を出迎えてくれた。ピーダハン語は現存している他のどの言語とも関係がなく、わずか8個の子音と3個の母音<sup>3)</sup> からなる、現在知られていることばの中では最も単純な音体系をした言語の一つとされる。しかしこの言語は非常に複雑な配列の音調や強勢、音節の長さを持つので、ピーダハンの話し手はまったく母音や子音を使わなくても唄ったり、ハミングしたり、口笛を吹いたりして互いに会話をかわすことができるのである<sup>4)</sup>。ピーダハン語を母語としない人々にはほとんど困り果てる難解なことばで、エヴェレットと彼の妻ケレンが1970年代にキリスト教の宣教師としてピーダハンの人々の中に入るまでは、部族外には誰一人としてこのことばを使える人はいなかった。エヴェレットは最終的にキリスト教から離れることになったが<sup>5)</sup>、妻ケレンと一緒に折にふれこの30年間この部族と生活をともにし、彼らは他の西洋人が誰一人なし得なかったピーダハン語の習得に成功した。

エヴェレットはこの言語特有の変調の多いスタッカートで “Xaói hi gáisai xigíaihiabisaoaxái ti xabiíhai hiatiíhi xigío hoíhi”, つまり、この村に「短い間滞在する」者と私を紹介してくれた。するとそこに居た男も女も響き渡るような大きな声で一声に “Xaói hi goó kaisigíaihi xapagáiso” と挨拶を返してきた。

エヴェレットは私の方を向いた。「みんな君が『曲がった頭』ではどう呼ばれているのか知りがってるよ」。

「曲がった頭」とはピーダハン語でこの言語以外の外国語一般を指す呼び方で、明らかに軽蔑が込められた言い方である<sup>6)</sup>。ピーダハンの人々は自分たちとは異なる言語をことごとく、滑稽きわまりなく劣ったものであると考えていて、こうして彼らが単一言語話者であることを守り通していることはアマゾン川流域の部族としては稀な存在といえる。人々はおどけて私の名前を互いに口々に伝え合っていたが、その名前は次々に口にされるたび少しづつ変化して、最後にはまったく聞き取れない発音になってしまった。彼らは二度と再びこの名前をそのまま口にするとはなかったが、その代わりに軽快で軽やかに響くピーダハン語の *Kaaxáoi* という名前を私にくれた。これは川下の村から来たピーダハンの男と言う意味で、どうも私はその人物に似ていると思われたようである<sup>7)</sup>。エヴェレットは後に私に「あの名前は私がこの部族について研究したいと思っていた主題にぴったりだった」と語ったものである。「彼らは外の世界から持ち込まれるものはすべて拒否する。欲しいと思わないのだ。これはブラジル人たちが1700年代に最初にこのジャングルで彼らに遭遇した時からずっと変わっていない」。

エヴェレットはこの前年の秋にイリノイ州立大学の言語・文学・文化学部で学部長に就任し、25年以上にわたってピーダハン語（Pirahã, pee-da-HAN と発音する）に関する専門書や論文を出版、発表している。しかし彼の業績は2005年の初めに彼自身のウェブサイトに「ピーダハン語の文法と認知に対する文化的制約」<sup>8)</sup> という論文を掲示し、この論文が同じ年の秋に *Current Anthropology*<sup>9)</sup> という専門誌に掲載されるまでは一般にはそれほど知られてはいなかった。この論文はこの種族の生活環境や文化が極端なまでに単純であることを説明したもので、エヴェレットはピーダハン語には数詞や決まった色彩語、完了時制<sup>10)</sup>、深層記憶、美術や絵画の伝統などが一切なく、さらに「すべて」「それぞれ」「あらゆる」「ほとんど」または「少ない」などの、言語学者たちが人間に共通する認知の基本構成要素の一つであると考えている数量詞を持たないことを明らかにした。しかしながら、それまでの見解を根底から覆す主張として注目されることになったのはピーダハン語には再帰性（recursion）<sup>11)</sup>を示す証拠が見つからないという主張であった。再帰性とは話者が異なった複数の独立した思考（「人が道を歩いて行く（“the man is walking down the street”）」と「その人は山高帽をかぶっている（“the man is wearing a top hat”）」を繋げて1つの文（「山高帽をかぶっている人が道を歩いて行く（“The man who is wearing a top hat is walking down the street”）」にする時のように、1つの句を同種類の別の句に挿入するという言語学的操作のことである。絶大な影響力を持つ言語理論学者のノーム・チョムスキー（Noam Chomsky）は最近自身の提案した普遍文法理論に新たな修正を施し、そこでは再帰性こそがすべての言語に必要な不可欠な要素で、これが可能なのは人間には他の動物にはない認知能力が備わっているからだ、と強調している<sup>12)</sup>。

ハーバード大学の認知学者スティーブン・ピンカー（Steven Pinker）はエヴェレットの論文を「パーティーに投げ込まれた爆弾」<sup>13)</sup>と呼んでいる。エヴェレットの論文については何ヶ月もの間社会科学のブログや電子メール上で激論がかわされた。エヴェレットも一時はチョムスキー言語学の熱心な支持者であったが、彼はこの論文で、ピーダハン語は普遍文法理論にとって「深刻な反例」となるばかりか、このような事例は他の言語には見つかりそうもない例外的な事例といったものではなく、実際に起こりうる可能性が十分ありうるものだ、と強く主張している。エヴェレットは「これに似た他の事例が今まで見つかっていない理由の1つには、要

するに、このようなことは絶対に起こり得ないのだと皆が聞かされ続けてきたことがある」と言う。また、エヴェレットがピーダハンの人々を一見他に類を見ない言語学的・文化的未開状態の民族であると記していることにびっくり仰天する言語学者もいた。中には有名な言語学のプログラムの編者に当たった電子メールで「エヴェレットは正真正銘のボルヘスの幻想家か、そうでなければ現地の人々にまんまとはめられたマーガレット・ミード的人物に違いない」と書いた読者もいたほどだ。

村に着いてしばらくして私自身もエヴェレットのピーダハンについての説明には疑問を抱き始めていた。そんな時、私たちがまだ荷物を開けている最中に11歳ぐらいの一人のピーダハンの少年が川の側の木々の中から走り出してきた。彼はニコッと笑いながら私たちが先ほど乗ってきて降り立った水上飛行機の驚くほど正確に作られた模型を自慢げに見せびらかしていた。その模型はバルサの木を削って作ったもので、長さは4フィートくらいで、小さい線材の部品を使ってプロペラも付けられていて、少年が指でその羽を回せるようにもなっていた。この他にも先が次第に細くなった胴体や羽やフロートもついていた。私はエヴェレットにこの模型はピーダハンの人々は芸術作品を作らないという彼の説明に矛盾しているのではないかと尋ねた。エヴェレットはほとんど顔も上げずに、「彼らは飛行機が着くたびに模型を作るんだ。でも飛行機が来ていない時には手元に置いておくことはしない。一種連鎖反応的に別の者も同じことをするようになるけれど、そのうちにだれもしなくなるよ」と言った。確かにその通りで、後になって私はその模型が壊れて泥がついたまま川の側の雑草の茂みにみすぼらしく捨てられているのを目にした。私がこの村に滞在した6日間に彼の他に誰も同じような模型を作った者はいなかった<sup>14)</sup>。

エヴェレットの論文に注目が集まり、論争が始まったのを受けて、彼は批判的な学者達に対してぜひアマゾンに来てピーダハンを直接観察するように勧めた。最初に彼の勧めに応じた人物は43歳のアメリカ人の進化生物学者テクムセ・フィッチ (Tecumseh Fitch) で、彼は2002年にチョムスキーとハーバード大学の進化心理学者であり生物学者でもあるマルク・ハウゼル (Marc Hauser) と再帰性についての重要な論文を共同執筆していた。そういうわけでフィッチは自分の従兄弟で、パリでソメリアをしているビルと一緒に、エヴェレットと私が着いた2週間後にピーダハンの村に水上飛行機で着くことになっていた。飛行機が水上に降り立つとすでにピーダハンの人々は川岸に集まっていて、大きな歓声を上げ始めた。二人は操縦席から降り立った。フィッチはラップトップコンピューターを携帯していたが、この中にはピーダハン語について実地で実験するための1週間分の言語学の実験材料がプログラムされていた。彼らはすぐに興味深そうな様子をした現地の人々に取り囲まれた。フィッチと従兄弟はそれまでも一緒に世界の僻地にまでよく旅した経験があったので、自分たちは先住民族の人々とすぐに共感関係をうちたてる術を心得ていると自信を持っていた。そこで彼らはカップ状に丸くした手を彼らの口元に持っていき、アビ鳥の鳴き声を交互にまねて吹いてみた。しかしピーダハンの人々は無表情で見守っているだけだった。するとビルは大きな片方の指を一本もう一方の手の平に打ち付けてパチンパチンと大きな音を鳴らし始めた。しかしピーダハンの人々は無表情のままだった。フィッチらは意気消沈して肩をすくめ、彼らの気を引くのを諦めた。

「普通はこんなふうにとちょっとふざけたことをすると、実に簡単に知らない人たちでも引き込

むことができるのに」とフィッチは後で言った。「でもピーダハンの子ども達はそれにまったく乗ってこなかったし、彼らの親達も同じように興味を示さなかった」。エヴェレットは軽蔑したように鼻を鳴らしながら笑い声を上げた。「ああいうことは彼らの文化ではまったく意味がないんだ。だから興味を示さないんだよ」と彼は言った。

この2,3週間前、私はスコットランドにいたフィッチに電話をしていた。彼は現地のセント・アンドリューズ大学で教授をしている。彼は「私はこの旅を予備的な実地調査のためにしたいと思っている。私はダンが言っていることのどれくらいが正しいのか自分のこの目で確かめたいのだよ」と私に語っていた。

エヴェレットは言語学の専門家の間では短気で知られていて、学究上礼儀とされることなどに對しても我慢できない性格である。彼はカリフォルニアとメキシコの国境に位置するホルトヴィルという町で労働者階級の家庭に生まれた。この町で彼の酒飲みの父レオナルド（Leonard）はバーテンダー、カウボーイ、機械工など様々な仕事をした。エヴェレットは「うちの家には本が一冊もなかったと思うよ。父にとっては大学で教鞭をとったり、ネクタイを締めた者は『女々しいやつ』なんだ—どいつもこいつもだ。この影響がまだいくらか僕の中に残っているのではと思うよ」とエヴェレットは言った。エヴェレットが知的生活を経験したのは主としてウェートレスをしていた母を通してであった。この母は彼が11歳の時に頭部の動脈瘤でなくなっている。彼女はリーダーズダイジェストの雑誌やら医学百科事典のセットを家に持ち帰ってくれたので、エヴェレットはこれらをなんとか覚えようとしたものだ。高校生の時マイ・フェア・レディーの映画を見て言語学者になろうかと考えるようになった。後で述べていることであるが、映画のヘンリー・ヒギンズ（Henry Higgins）教授の仕事を見て「知的な雰囲気引かれるところもあったし、また何より音声学者は金持ちになれるように見えたから」というのがその理由であった<sup>15)</sup>。

十代の時エヴェレットはロックバンド（このバンドのキーボード演奏者は後にサイケデリックロックバンドグループ「アイアン・バタフライ」(Iron Butterfly)の初期のメンバーの一人になった)でギターを演奏したり、マリファナを吸ったりLSDを使用していたが、1968年の夏にレークサイドで同じエル・キャピタン高校の生徒であったケレン・グレアム（Keren Graham）に出会い、生活態度が一変した。ケレンは基督教の宣教師の娘でブラジル北東部のサテレマウエ族と呼ばれる先住民族の中で一緒に育てられた。彼女はエヴェレットを教会に誘い、家に連れて帰って家族に会わせた。「みんな愛情と思いやりをもった家族で、しかもアマゾンであのようなすごい経験を味わっていたんだ」とエヴェレットは述べている。「彼らはいろいろ私の力になってくれたし、すばらしい少年だともほめてくれた。これはぼくには全くそれまで経験したことのない初めての出来事だった」とエヴェレットは語っている。1968年の10月4日に17歳で彼は新生キリスト教徒<sup>16)</sup>になった。「月並みな言い方だけど僕は自分の人生が完全に変わったように感じたよ。真暗闇から陽の当たるところに踏み出したようだった」。彼は薬物の使用をやめ、彼とケレンが18になって、二人は結婚した。一年後、3人のうちの最初の子どもを授かり、彼らは宣教師になる準備を始めた。

エヴェレットは1976年、シカゴにあるムーディ聖書学院を卒業して海外宣教師の学位を得、



その後ケレンと一緒に SIL (*Summer Institute of Linguistics*) として知られる夏期言語学協会の会員になった。この SIL は国際的な福音主義の団体で、聖書を無文字社会の言語に翻訳することで聖書を広く世界中に広めることを目指す団体である。彼らはメキシコのチアパスに派遣されることになり、そこでエヴェレットが厳しいフィールドワークの訓練に耐え忍んでいる間、ケレンは彼らの子ども達——この時までにはすでに3人になっていたが——と一緒にジャングルの小屋で暮らしていた。エヴェレットは50マイルの徒歩移動に耐え、マッチと水と一本のロープ、一本のマチュエテ（ナタ）、そして懐中電灯だけでジャングルの奥深くで数日間生き抜く訓練を受けた<sup>17)</sup>。

二人は翻訳技術の訓練も受けたが、エヴェレットにはこの分野で生まれつきの才能が備わっていることが証明された。彼の友人であるピーター・ゴードン (Peter Gordon) はコロンビア大学の言語学者でピーダハン語には数詞がないことについての論文を発表しているが、彼によるとエヴェレットは多くの人のの中から彼がそれまで耳にしたことのない言葉の使い手を見つけ出してみせて、講演を聴きに來ていた人々をいつも驚嘆させていた。ゴードンが言うのに、「彼は初めて聞くことばでも20分くらいもたつとその言語の基本的な構造や文法がどのようになっているのかを理解することができたし、また彼は信じられないほど幅広い知識を持っていて、とにかく頭が良くて、何でも完璧に理解していた」。エヴェレットの才能は、20年にもわたってなんとかピーダハン語に堪能になろうと奮闘していた SIL の教授達の目にも明らかであった。1977年の10月、SIL の勧めでエヴェレット、ケレン、そして3人のまだ幼い子ども達はブラジルに引っ越すことになり、最初は準備のためベレムの町へ行き、そこでポルトガル語を学び、そして一年後にマイシ川の河口にあるピーダハン村へ入った。ケレンは私に「その当時はピーダハン語が言語学的にそんなに難しい言葉であるなんて知る由もなかったの」と語ったものである。

マイシ川とマルメロス川にそった小さな村々に約350人のピーダハンが散住していた。エヴェレットと一緒に訪れた村はこの地域のどこにでもある典型的な村で、4本の支柱の先にヤシの葉を置いただけの小屋が7軒建っていた。これらの小屋の床は土のままで壁や家具はなく、ただ寝床となる場所だけは細い枝を積み上げて、床から少し高くなった縁台になっていた。このようにすぐにも壊れそうで、おそらく3,4人の家族が住むと考えられる住居は、川堤の近くの低木の藪や草地の間を通る曲がりくねった小道に沿って建てられていた。家にはほとんど持ち物もなく、置いてあるのは鍋と平鍋、マチュエテと呼ばれるナタ、そしてナイフくらいで、しかも道具と呼べるものと言えば、木を削る道具（矢じりを作る時に使う）、粗い目で編んだヤシの葉の籠、そして木製の弓矢くらいでそれ以外のものを作ることはなかった。装飾品といえばブラジルナッツや木材、サルバ（これはチューインガムを作るのに使う弾力性のある液汁）との交換でピーダハン相手に物々交換をおこなう交易商人から手に入れた種や歯、羽、ビーズ、ジュース缶の引き手で作った邪悪な精霊を追い払うため身につける簡素な首飾りくらいであった。

ピーダハンの人々は他のアマゾン流域の狩猟採集民族と違って、宣教師や政府の機関がなんとかして彼らに農耕を教えようと努力をしても、一向に勧めを受け入れようとはしない。彼らはジャングルに数歩入ったあたりの雑草がおおい茂った小さな土地を守り、そこでやせこ

けたマニオク<sup>18)</sup>を栽培している。「この村で栽培されているものといえば、外から来た誰かが植えたものか、それとも誰かが何かの種を口から吐き出したものが大きくなったのかのどちらかだよ」とある朝村を散歩している時エヴェレットは私に言ったものだ。ピーダハンは完璧に魚類や獣鳥の肉で生活していて、毎日その日に必要な分の獲物しか取らない。彼らは肉を塩漬けにしたり薫製にしたりして保存する方法を教わっても全く関心を示さないし、マニオク粉も2, 3日程度もつ分の量しか作らない。（エヴェレットが調査したことのある別のアマゾンの種族のカワヒヴ（Kawahiv）は何ヶ月分もの分量を作る）。彼らの数少ない近代化への譲歩といえば服装だけで、大人の男たちは交易商人から手に入れるTシャツと半ズボン、女たちは自分で縫った簡単な綿の婦人服を身につけている。

「ここに来た最初の数年は『強烈な色彩をたくさん使った派手な』住民が住む地域に行かなかったことを悔やんだものだ。例えばイング族（Xingu）のように体中に色を塗ったり、リッププレートを使ったり、お祭り騒ぎをしたりする村人が自分の頭にはあったんだ。でも後でわかったのは、実はこの場所こそ長年なんとか経験したいと出会いをずっと願ってきた、強烈な文化を持った所だったということだ。ここにある文化は裸眼にはそのように見えないけれども信じられないほど強烈で、アマゾン流域では最強の文化といえるものがここにはある。アマゾンの歴史、いや多分世界の歴史を見ても、ここの人々程変化を拒否し、外からの影響をかたくなに拒んできた人々はいないと思う」とエヴェレットは私にいった。

信頼のおける考古学者の推定によれば、ピーダハンがアマゾン流域に来たのは1万年から4万年くらい前のことで、ホモ・サピエンスの多くの集団がベーリング海峡をわたってユーラシア大陸から南北アメリカ大陸にやって来た時期より後のことになる。ピーダハンはかつてはムラ族（Mura）と呼ばれる、より大きなインディアン集団の一部族であったが、ブラジル人が1714年に最初にムラに出会った時にはすでに主流の部族からは離れていた。ムラの人々はその後も続いてポルトガル語を習いブラジル人の生活様式に同化していったが、結局彼らの言葉は消滅してしまったと考えられている。一方、ピーダハンはジャングルの奥深くに引き込んでしまった。1921年に人類学者のクルト・ニムエンダジュ（Curt Nimuendaju）<sup>19)</sup>がピーダハンの村に入って生活したが、その時の印象を次の様に記している。「彼らはほとんど近代文明の素晴らしいことに関心を示さないし、文明化した人々と付き合いたいと思っている素振りも見せなかった」。

SILが最初にピーダハンと接触を持ってからかれこれ50年近くになる。最初は宣教師の夫妻アルロ・ハインリクスとヴィー・ハインリクス（Arlo and Vi Heinrichs）がマルメロス川の畔に居を構えた。ハインリクス夫妻はそこに6年半とどまり、この言葉の習得に奮闘した。この言語で用いられる音素（語を構成する互いに対立する異なる音）はとにかく難しく、強く鼻にかかる音や息を急速に吸い込む際の音、さらに唇を早く開閉して作る弾音などが目立った特徴としてある。1つ1つの単語も覚えにくい。というのはピーダハンは習慣的に名詞の形を変化させてひとまとまりの音列にしてしまうからである。さらに頭が痛いのはこのことばが音調言語であることである。つまり語の意味が音の高低の変化によって左右されるのである。（「友達」と「敵」を意味する単語は同じ音の並びからできているが、音の高低で意味が変わる<sup>20)</sup>。）ハインリクス夫妻がことばの習得上一層難しく思ったのは、他にも少ないながらアマゾン地域の言語にも見

られる特徴であるけれども、ピーダハン語には男性、女性語が別々にあることである。例えば、女性語は男性語より子音を一つ少なく用いるなどである<sup>21)</sup>。

「とにかくなんとか文法の初級程度に困らなくなるくらいまで上達するようにがんばったよ」とアルロ・ハインリクスは私に言った。それから2年して彼は聖書のルカ伝から放蕩息子の例え話を選んで翻訳に取りかかった。ハインリクスは彼のたどたどしい訳を一人のピーダハン男性に読んで聞かせた。ハインリクスはその時の様子を次のように回想している。「そのピーダハンの男は頷くような独特の所作でこう言ったんだ。『なかなか面白い話だ。しかし霊的共感というものが感じられないよ。つまり、心底からわき上がるインパクトに欠けている。単なる話に終始している』」。その後ハインリクス夫妻は繰り返しマラリアの発作と闘い、結局 SIL によってブラシリアの町の行政職に任命された。1967年には彼らの後任としてスティーブ・シェルドン (Steve Sheldon) と妻リンダ (Linda) が村に入るようになった。

シェルドンはここの村人と過ごす間に言語学の修士号を取得したが、ピーダーハン語が期待した既存の型にどうしてもうまく当てはまらないため焦っていた。彼と妻は SIL のカウンセラーとの研究集会で不満を漏らした。その時のことをシェルドンは次の様に述べている。「たとえば『そういうはずがないと思えることがこの言語にはあるんですよ』と相談すると、答えときたら月並みで——そんなことは言語では通常は起こるはずがないことだよ——『だから、わかるはずなので、もう少しよく調べてみることですね』と言う具合になってしまう」。自分の進歩の遅さにシェルドンは深刻に悩んだ。朝起きると胃がムカムカすることがたびたびあった。彼はピーダハンと10年過ごした後1977年にブラジルの SIL 会長に昇進し、エヴェレットにジャングルで彼の後を継いでほしいと頼んできた。

エヴェレットと彼の妻は村人に歓迎されたが、ピーダハン語で簡単な会話が交わせるようになるまでには何ヶ月もかかった。「互いに共通のことばを持たないで新しい言語を学ばなければならない場所など、今では世界中めったにないよ。これは完璧に単一言語地域状況と呼べる事態だよ」とエヴェレットは私に語った。エヴェレットは言語の現地調査法については SIL での恩師でもある伝説的なフィールドワーク言語学の専門家でミシガン大学の言語学部の学部長をつとめた故ケネス・パイク (Kenneth Pike) から教えを受けていた。パイクはタグメミックスと呼ばれる言語分析方を提唱した教授であるが、調査にあたってはまず普通名詞から調べ始めるようにとエヴェレットには教えていた。エヴェレットの説明では、『まず「一本の棒」にあたる単語を見つげ出す。次は「二本の棒」にあたる言い方を見つけ、そして「一本の棒が地面に落ちた」、「二本の棒が地面に落ちた」と進める。すべて身振りでやらなければならないし、それで、その言語がどのような節構造を持つのか、つまり主語、動詞、目的語などの位置、順序がどうなっているのかといった基本概念をつかまなければならない』ことになるらしい。

実際の作業はなかなか難しい。これはピーダハンと一緒にあってそれほど日が経たないうちに身をもって知ることになったことである。ある朝私が防虫剤をつけていると、ひとりのピーダハンの老人がこれをじっと見ている、エヴェレットに私は何をしているのかと尋ねた。私は身振りを使ってもなんとか彼と意思伝達がしなくなって、自分の右手の親指と人差し指を押し合わせ、それを空中で左右に振る動作をしながら同時にブーンと虫の飛ぶ音をさせた。そして今度はその指を前腕に持って行き、最後にその指の虫がとまっていた場所を平手でパシッと



たたいた。男は当惑した様子でエヴェレットに「彼は自分を叩いた」といった。私は再び同じことを繰り返した、ただし今度はもっとよく聞こえるように大きな虫の音を出した。男はエヴェレットに「飛行機が彼の腕に着陸した」と言った。エヴェレットがその男に私が何をしていたのかを説明すると彼は哀れむような軽蔑的な眼差しでじっと私を眺め、そして背を向けて行ってしまった。エヴェレットは大声で笑った。「君が彼に伝えようとしたことは君に備わった恒常的な性質、つまり虫が嫌だ、ということで、彼らはそういう風にはことばを使わないし、また理解することもできないんだ。虫は彼らにとっては現実の日常生活の具体的な経験に関係するものなんだ」と彼は言った。

「それにしても私が虫のまねをしていることがわからなかったのにはびっくりしたよ」と私は言った。

「君がやってみせたことがどれほど個別の文化に関わることなのかを考えても見ろよ。君の手の動作、それから虫が飛ぶ音。我々が動物を表す時のやり方だってすべて文化に根ざしたものだよ」とエヴェレットは言った。

エヴェレットがピーダハンの言葉を単なる表面的な違いを越えて深く理解するにはこのような多くの文化の溝を越えなければならなかった。「僕はジャングルに入って彼らが畑を作るのを手伝い、魚釣りにも一緒に行った。彼らとまったく同じにはなれないが、ことばを肌で感じたり吸収するためにはできる限りの努力をしなければならないんだ」と彼は言った。この部族は1,2世代を遡って蓄積された記憶というものを持っていないし、新たに作りだした独自の神話もないと彼は強く信じている。リオデジャネイロ国立大学の人類学者であるマルコ・アントニオ・ゴンサルベス（Marco Antonio Gonçalves）は1980年代に18ヶ月間ピーダハンと暮らし、この民族の信仰についての学位論文を書いた。ゴンサルベスはまずまずのピーダハン語を話すことができた。この民族には創世神話がない点では私と同意見であったが、彼はさらに進んでアマゾン地域の民族で創世の神話を持つ部族はほとんどないと断定した。エヴェレットが言うには、ピーダハンがこの地にやって来る以前やジャングルができる前にはここには何があったのかという質問をして、なんとか答えを聞き出そうとすると、彼らは決まって「ずっと前から変わらずこうだった」としか答えない。

エヴェレットはまたピーダハン語には決まった色彩語がなく、その代わりにある瞬間から次の瞬間へと変化する様子を描写することばを使うことを知った。エヴェレットの説明では「もし彼らに赤いコップを見せたら、彼らは多分『これは血のようだ』とか、『*vrvucum*」（これはこの地方で自生する赤い染料を取り出すのに使う小果実）みたいだ』などと言うだろう」ということであった。

最初の年が終わる頃までにはダン・エヴェレットはフィールドワークに使える程度のピーダハン語を身につけていた。ケレンも独学で言語学習に挑み、腰にカセットレコーダーを革ひもでくくりつけ、家事をしながらオーディオテープを聴いていた。（エヴェレットの家族はピーダハンの通常の小屋よりも少し大きめで、もう少し文明化した小屋に住んでいた。例えば、壁もあり鍵のかかる収納部屋もあった。）

一家のアマゾン滞在2年目にケレンとエヴェレットの長男シャノンがマラリアにかかり、ケレンはとうとう昏睡状態に陥ってしまった。エヴェレットは川の交易商人からボートを借りて

何日もかけてジャングルを抜け、彼女を病院に運び込んだ。彼女を病院に下ろすや否やエヴェレットは村に引き返した。(ケレンは数ヶ月間ベレムの町で過ごして健康を取り戻し、再びエヴェレットの元に帰った。)「聖書を信じるキリスト教徒は他人に救いの喜びをもたらすことこそ自分たちの使命であると堅く信じている。たとえ自分たちが死ぬ羽目になったり、ムチ打たれて死に至るとも、また投獄されることになっても、人のために尽くすのが神の御心になうと信じているのだ」とエヴェレットは言った。

エヴェレットがアマゾンに来るまでに言語学に関して受けた訓練はフィールドワークの技法に限られていた。「僕はとにかく最小限なんとか実際に役に立つ、正規の言語理論を学びたかった。新約聖書の翻訳がきちんとできるように、基礎的な言語学の訓練を受けたかったんだ」と私に言った。このような状況はSILがアマゾンで活動するためブラジル政府とかわした契約が切れると一変した。SILはエヴェレットに大学院生としてサンパウロ州にある州立カンピーナス大学(UNICAMP)に入学するように強く勧めた。というのもブラジル政府は、もし絶滅に瀕している言葉を記録するという目的を持った言語学者であることが証明できるなら、その場合に限りて引き続き先住民居住地での滞在許可を与えてもいいという方針だったからである。1978年の秋UNICAMPでエヴェレットはチョムスキー理論と出会うことになった。「僕にとってこれは二度目の改宗体験であった」と述べている。

1950年後半といえばチョムスキーは当時まだMITの教授になったばかりで、最初に注目を引き始めた時は行動主義が社会科学で優位を誇っていた時代である。B. F. スキナー (B. F. Skinner) によれば、子どもはちょうど実験室の動物が食べ物が出て来るレバーを押すのと同じで、単語や文法を正しく使った場合にほめられることによって言葉を学ぶのである。1959年にスキナーの著書『言語行動』<sup>22)</sup>の内容を辛辣に攻撃した書評の中で、チョムスキーは子どもが言語を使えるようになるのに模倣、指示、報酬などに依存することはなく、このことは子どもがそれまでに聞いたこともない文法的な文を作る能力を持っている事実が根拠となる、と述べている。彼の著書『言語論』(*Reflections on Language*)<sup>23)</sup>では、「もともと生得的にヒトの言語を獲得する仕組みをもっていない生物がヒトの言語を知るようなことになるなら、これは途方もない知的業績の達成といえるだろう」とも述べている。

チョムスキーは言語特有の能力は生まれながらにヒトの脳に組み込まれているという仮説を提案した。彼はこの生得的能力を「言語器官」と呼ぶ。この器官にはあらゆる言語が表面上いかに異なるように見えても共通して持つ普遍文法とも呼ばれる不変の規則群が備わっていると考えられる。チョムスキーは、この言語器官は肝臓や心臓のように切り裂いて解剖することはできないが、言語に内在する抽象的な構造を詳細に分析することでどのようなものか記述できると明言した。「自然言語の特性、その構造、仕組み、そして使い方を調べることで、人間の知性という特異な特性をいくらか理解することが望めるかもしれない」と記している。

1950年代以降、世界中の大学のチョムスキー派言語学者達は言語の形式的分析に取り組み、文を枝分かれ状の名詞句、動詞句、前置詞句という一層複雑な樹形図に分解、表示し、さらには「Xバー」「変形」「移動」「深層構造」など——これらは、すべての言語を構築する基本原則となる要素としてチョムスキーが用いる専門用語の数例であるが、の定式化に取り組んだ。「僕

はそれまで厳密さからいえばかなり低いレベルでしか言語学をやってこなかった。チョムスキーの論文や同じ分野で研究をする研究者の著作を読み始めたら即座にこれは全く違ったレベルの仕事——つまり本当に科学と呼ぶにふさわしいものであることがわかったよ」とエヴェレットは語っている。エヴェレットは UNICAMP に提出する博士論文を厳密なチョムスキー理論の枠組みを用いてピーダハン語を分析したものにするのを思い立った。エヴェレットは自分の時間をサンパウロと資料を収集するピーダハン村とに分割し、1983年に論文を完成させた。ポルトガル語で書かれ、ブラジルで後に書籍として出版されることになる『ピーダハン語と統語理論』<sup>24)</sup> はチョムスキー流の樹形図がいたるところに見られる高度に専門的な考察内容となっていた。しかしエヴェレットは「当時からピーダハン語にはチョムスキーの枠組みではうまく扱えない変則的な言語現象がかなりあることに気づいていた」と言う。「考察対象から多くのものを除外していることは自分でも承知していた。でもこの溝をどうすれば埋めることができるのか当時はまったく思いもよらなかった」とエヴェレットは私に語った<sup>25)</sup>。

この博士論文によってエヴェレットは米国学術評議会から特別給費研究員に選ばれ、同時に全米科学財団から1984-1985年の学期に客員研究員としてMITで研究滞在する奨学金を得た。MITではエヴェレットはチョムスキーの向かいの研究室を使うことになった。そのうち彼はこの有名な教授は聡明だが辛辣な人でもあると思う様になった。「誰かに何かある理論を説明しようと思うとき、こういうことは聞いてほしくないと思う質問がいつもあるものだが、チョムスキーがきまって最初に聞いてくるのがまさにこの種の質問なんだ」とエヴェレットは語っている。

1988年エヴェレットはピッツバーグ大学で職を得た。その頃にはチョムスキーの規則体系は彼自身あまりにも奇異だと考えたほど複雑な状態に達してしまっていて、新たにすべての言語に内在する原理を説明するのに、それまでよりはるかに単純なモデルができないかと新しい構想を練り始めていた。エヴェレットも新たなチョムスキー理論の進展に遅れないよう忠実に後を追った。「チョムスキーは書き上げた論文をすべて僕に送ってくれたよ。僕は多くの他の学者と同じ様にチョムスキーの講義のハンドアウトを受け取り、その日の講義で話される理論がどこまで進むのかを正確に理解するため彼の講義には欠かさず参勤した」と彼は述べていた。同時にエヴェレットは、ピーダハン語にはあまりにも他の言語にはない特異なことが多くて、これが次第に彼を悩ませる様になったと語っている。「チョムスキーの言語学ではまったく扱えないことばかりだった。チョムスキー理論は樹形構造が描ける特性についてしか議論が許されないんだ」と彼は私に語った。

90年代の初めのころ、エヴェレットはチョムスキー以前に活躍した言語学者、例えば1939年に亡くなり、多大な影響を与えたプロイセン生まれのエドワード・サピア（Edward Sapir）などの論文を読み返し始めた<sup>26)</sup>。サピアは文化人類学者フラン・ボアス（Franz Boas）<sup>27)</sup>の弟子で、イエール大学で教鞭をとったこともあり、また南北アメリカに住む何十という先住民の言語を研究した言語学者である。サピアは言語化される際の文化の役割に大きな関心を寄せた。彼はチョムスキーが傾倒する普遍性の重要性も見通していたが、それよりも彼はそれぞれの個別言語をかけがえのない特別なものにしていく多様さの方により興味を抱いた。1921年に出版された著書『言語』<sup>28)</sup>でサピアは、言語は学んで得た技能で、「あらゆる創造的努力が異なるように、

言語も皆違うものである—多分意識的ではないであろうが、しかしそれにもかかわらず、宗教や信条や習慣、異なった民族の芸術が異なるのと同じ程間違いなく異っている」と書いている。しかしチョムスキーは、言語を研究する際に文化はほとんど重要な役割を果さず、また限られた数の人にしかわからない消滅寸前の言葉を記録するため、わざわざ遠く離れた場所に赴くなどというのは的を外れた努力である、と思い込んでいた。チョムスキーのこのような見解がこの頃は圧倒的に優勢であった。エヴェレットはこれはかえって都合がいいことだと思い始めた。

「遑ってサビアが20年代に書いたものを読んだ時、私を感じたことは、これはまさに我々が失ってしまった伝統そのものではないか、ということだ。皆はある言語を研究する場合チョムスキー流の形式化がうまくできると、これでその言語の実質的な研究が済んだと思う。ところが個別言語として何か新しい知見が得られたかと言えば、それだけではまったく何も成果がなかった可能性もある」とエヴェレットは言った。

エヴェレットはチョムスキー言語学の基本となる原理を疑い始めた。それは文法の諸原理があらかじめ脳に組み込まれていなければ子どもは言語を習得することはできないというものがあった。それよりむしろ幼児は母親の胎内で聴覚能力を獲得した瞬間から言語に浸され、そして両親や周りの大人が多大なエネルギーを費やして子どもに単語の使い方や単語を連ねて文にするやり方を教えるのではないか——そして同じプロセスがそれ以後何年も続いていく、とエヴェレットは推論した。チョムスキーが主張するように、言語は単に「体の他の器官と同じように成長するだけだ」というのは本当だろうか？エヴェレットもヒトに言語に関わる生物学的能力が備わっていることは否定しなかった——ヒトに言語を使うための生得的な脳神経上の仕組みが備わっていなければ言葉を話すことはできないのだ。しかし、彼は文化というものがチョムスキー理論が考えるよりずっと重要な働きをするという点に心を動かされ、「問題に対する自分の方法論を根底から再吟味する必要がある」と判断した。

(以下次号)

## 注

- 1) ジョン・カラピント (John Colapinto) は2006年から雑誌『ニューヨーカー』の専任執筆者で、代表作としてはベストセラーノンフィクション『ブレンダと呼ばれた少年——ジョンズ・ホプキンス病院で何が起きたのか』(村井智之訳、無名舎) (*As Nature Made Him: The Boy Who Was Raised as a Girl*, 2000) や、英語で発表された小説を対象とする最大の国際文学賞である国際IMPACダブリン文学賞にノミネートされた『著者略歴』(横山啓明訳、早川書房) (*About the Author*, 2001) などがある。
- 2) 原題は“The Interpreter.” *The New Yorker* (April 16, 2007) に掲載された。その後 *The Best American Science and Nature Writing 2008* (Edited and with an Introduction by Jerome Groopman, Houghton Mifflin Company: Boston・New York) に収録された。この翻訳は著者からの許諾を得て掲載している。
- 3) /p, t, k, ʔ, s, h, b, g/ の8つ (男性語) の子音と /i, a, o/ の母音。
- 4) 一般に母音や、子音の数が少ないと単語が長くならざるを得ないが、音調や強勢、音節の長さ、またコンテキストによって意味が決まることもあり、それほど長くならず済んでいる。音調は高低、強勢は強弱、また音節の長さは5種類識別される。母音や子音といった分節素を使わない会話にも使われる。状況によっていくつかの種類があり、それぞれが文化的な役割を持つことからエヴェレットは社会言語学者デル・ハイムズ (Dell Hymes) の用語を借用して「ディスコースチャンネル」(Channels of



- discourse）と呼んでいる。この話法には通常分節素を使った発話の他にさらに4種類あり、それぞれ「口笛話法」「ハミング話法」「唄い話法」「叫び話法」と呼ばれる。例えば、ハミング話法は自分の正体を知られたくない場合や内輪の話をする時などに使われる発話方法で、また口笛話法は男性が狩りをしたり、男同士の手荒な遊びの最中などに用いられる話法、など発話の状況や目的によって選択される。（Everett 2008, 185-6.）
- 5) このテキストの中心課題でもあるピーダハン文化の影響が大きい。ピーダハンの文化では直接体験したこと以外についての話は無意味である。エヴェレットの科学者としての実証を重んじる態度と相まって、聖書の言葉や奇跡を信じるころから始まる信仰に確証が持てなくなっていった。
- 6) 英語では“crooked head”とか“twisted head”にあたる。
- 7) テキストにあるようにピーダハンは自分たちの言葉以外は好まず、外国から来た人にも自分たちの名前をつけたがる。その際につけられる名前はピーダハンの中のよく似た人の名前が選ばれることが多い。また、ピーダハンは自分の名前も頻繁に変更する。
- 8) “Cultural Constraints on Grammar and Cognition in Pirahã.” *Current Anthropology* Volume 46. 4, 2005. The Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research.
- 9) 当初原文では雑誌名が *Cultural Anthropology* となっていたが、インターネット版で *Current Anthropology* と訂正された。
- 10) ピーダハンでは単純な現在時制や過去時制、未来時制はあるものの完了形に当たるものはない。これは本訳・注（下）の「直接体験制約」による。英語の現在完了などは過去に起こったことについても現在の経験として述べたりする場合に使われるので「直接体験制約」には違反しないと思われるが、過去完了や未来完了等は過去のある時点、または未来のある時点を基準としてある動作が終了していた（または、するだろう）ことを表し、発話の時点とは関係のない事柄として語られるいわゆる「相対的時制」（relative tense）なのでこの制約に違反することになる。この制約は文化一般の基底にある制約で、それ故具体的に文として語られることがないので「完了形はない」という観察につながる。
- 11) この訳語については「回帰的」、「帰納的」という訳や、または「リカージョン」と記されることもあるがここでは「再帰的」と訳する。
- 12) 「再帰性」は当初埋め込み構文（部分が全体と同じ性質を有する）と同義で使われていたが、後に語をつなぎ合わせてより大きい単位を生成する「併合（merge）」と呼ばれる、原理的には無限に繰り返し可能な操作を指す拡大的な定義に変わった。さらにこの併合操作は言語固有の能力にとどまらず数の操作、つまり数学的思考能力の基本でもあるとも考えられている。一方ここでも強調されているがエヴェレットの主張は言語にリカージョン、つまり入れ子構造や階層的構造が見られるのは入れ子的認識の仕方が人間の脳の一般的な特性であって、文化や社会の様々な情報を伝達するのにこの階層構造が効果的である故に言語にも使われていると考えることもでき、言語能力固有の特性と考える必要はない、というものである。
- 13) “a bomb thrown into the party”
- 14) この理由については本訳・注（下）の「イビピーオ」の説明及び注釈を参照のこと。
- 15) この映画でヒギンズ教授の発音の部分吹き込んだのが有名な UCLA の音声学教授ラドフォゲッツ（Peter Ladefoged）であるが、彼もピーダハン語の調査でエヴェレットの案内でこの村を訪れている。なおヒギンズ教授のモデルはロンドン大学でのラドフォゲッツ教授の恩師であり、日本でもよく知られているダニエル・ジョーンズ（Daniel Jones）だと言われている。
- 16) born-again Christian
- 17) Wycliffe Bible Translators になるためのトレーニングの一環として誰もが受けなければならない“Survival hike”。
- 18) キャッサバとも呼ばれる塊茎で主食とされる。
- 19) “The Mura and Pirahã.” *Handbook of South American Indians*, vol. 3. Ed. by J.H. Steward. Smithsonian

Institution. Washington, 1948.

- 20) 「友」は *bagiàì* で最後の音節の [a] のピッチが高いのに対して「敵」は *bágiàì* で最初音節の [a] も高いピッチである。つまり語頭の音節のピッチの違いで意味が決まる。
- 21) 女性語には男性語で使われる [s] が無く [h] で代用される。
- 22) *Verbal Behavior*. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1957.
- 23) New York: Pantheon, 1975. 日本語版は井上和子・神尾昭雄・西山佑司訳、大修館書店、1979年。
- 24) *A Língua Pirahã e a Teoria da Sintaxe*, Universidade Estadual de Campinas, São Paulo, Brazil. (*The Pirahã Language and the Theory of Syntax: Another Look at the Design Features of Human Language*. Unpublished manuscript, University of Manchester, 2004).
- 25) 1984年にエヴェレットは妻ケレンとの連名で *Linguistic Inquiry* の“Squibs and Discussion”に“On the Relevance of Syllable Onsets to Stress Placement”と題するペーパーを発表している (Vol.15.4, pp. 705-711)。要旨はタイトルが示す様にピーダハンの強勢付与規則は音節の頭子音が有声か無声かが適用条件として重要であるというものである。一般に強勢は音節の「重量」によって決定でき、その音節の重量は音節内の韻構造、核構造によって決まり、頭子音は音節の重量に無関係であると考えられていた。従って普遍文法としては「韻投影」(Rhyme projection), 「核投影」(Nucleus projection) が強勢付与のためにパラメータとして設けられていた。これに対して、ピーダハン語は音節の重量は頭子音を含めた音節全体の投影が必要であることを示す例で、パラメータの修正が必要であると言うのが趣旨である。  
「パラメータ」の概念はそれまでのチョムスキー理論の行き詰まりを打破する仮説として注目されていた時期である。生成文法理論が提案されて以来の目標は、いわゆる普遍文法理論による説明的妥当性を満足する理論の確立であったが、実際の個別文法を記述、説明する理論があまりにも言語や個別の言語現象によって多様な形式、方法、制約が必要となり、研究が進めば進む程「普遍性」が遠のき「多様性」が増えるというジレンマが生じた。これを解決したのが、多様性を生む原理としての普遍性、つまりパラメータによる説明である。しかしながら、ピーダハンのさまざまな現象はここで指摘されている強勢現象にとどまらず既成のパラメータに含まれない項目が多く、これをめぐってさまざまな議論がなされたという経緯がある。
- 26) 言語学の歴史は長いが、チョムスキー理論は一種革命的な理論であったためそれ以前の言語学をさして“B.C.”, つまり “Before Chomsky” と呼ぶ言語学者もいる程である。それなら Everette の理論はさしずめ “A.D.”, つまり “After Dan” とでもすべきである、と Ron Grossman は *Chicago Tribune* に掲載した “Shaking language to the core” の中で述べている (June 10, 2007)。
- 27) Martin Joos は編著 (1957) の編者コメントの中で1950年代までのアメリカ構造主義言語学の言語観は「言語は互いに際限なく、また予想もつかない点で互いに異なる」と記し、これを「“the Boasian” approach」と呼んでいる。
- 28) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. San Diego Harcourt Brace Javanovich, 1921.

## 参考文献

- Berlin, B. and Kay, P. (1999) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Chomsky, N. (2000) *On Nature and Language*. New York: Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (2010) “Some Simple Evo Devo Theses: How True Might They Be for Language?” In Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (eds.) 2010, 45-62.
- Everett, D. (2008) *Don't Sleep, There Are Snakes: Life and Language in the Amazonian Jungle*. New York: Vintage Books (屋代通子訳『ピダハン』みすず書房、2012)。
- Everett, D. (2010) “Cultural Constraints on Grammar and Cognition in Pirahã.” *Current Anthropology* 46 (4):

621-646.

- Everett, D. (2012) *Language: The Cultural Tool*. New York: Pantheon Books.
- Everett, D. (2013) *Recursion and Human Thought: Why the Pirahã Don't Have Numbers*. (Edge: [http://www.edge.org/3rd\\_culture/everett07/everett07\\_index.html](http://www.edge.org/3rd_culture/everett07/everett07_index.html)).
- Fitch W. T. (2010) "Three Meanings of 'Recursion': Key Distinctions for Biolinguists." In Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (eds.) 2010, 73-90.
- Fitch, W. T., Hauser, M. D. and Chomsky, N. (2005) "The Evolution of the Language Faculty: Clarifications and Implications." *Cognition* 97, 179-210.
- Hauser, M. D. (2010) "On Obfuscation, Bbscurantism, and Opacity: Evolving Conceptions of the Faculty of Language." In Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (eds.) 2010, 91-99.
- Hauser, M. D., Chomsky, N. and Fitch, W. T. (2002) "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Does It Evolve?" *Science* 298, 1569-1579.
- Jackendoff, R. and Pinker, S. (2005) "What's Special about It? The Nature of the Language Faculty and Its Implications for Evolution of Language." (Reply to Fitch, Hauser, and Chomsky) *Cognition* 97 (2005) 211-225.
- Joos, M. (ed.) (1957) *Readings in Linguistics: The Development of Descriptive Linguistics in America since 1925*. American Council of Learned Societies.
- Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (2010) *The Evolution of Human Language: Biological Perspectives*. Cambridge University Press.
- Pinker, S. (1994) *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: Morro (椋田直子訳『言語を生み出す本能 (上) (下)』NHK 出版, 1995).
- Pinker, S. and Jackendoff, R. (2005). "The Faculty of Language: What's Special about It?" *Cognition* 95, 201-236.
- Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Hare Press Publishing, (2010) (泉井久之助訳『言語：ことばの研究』紀伊国屋書店, 1972/ 安藤貞雄訳『言語—ことばの研究序説』岩波文庫, 1998).

